

# 発達障害児をもつ家庭の家族機能における一考察 —きょうだいからみた家族機能について—

古川樹理<sup>1</sup>, 古賀靖之<sup>2</sup>

(<sup>1</sup>児童養護施設聖華園,<sup>2</sup>西九州大学)

(平成18年12月22日受理)

**Consideration in Family Function of Family with an Children with Developmental Disorder.  
About Family Function that Sibling of Children with Developmental Disorder.**

Juri FURUKAWA<sup>1</sup> and Yasuyuki KOGA<sup>2</sup>

(<sup>1</sup>Child care institution-Seikaen, <sup>2</sup>Nishikyushu University)

(Accepted December 22, 2006)

## Abstract

The family with a children with Developmental Disorder tends to hold a trouble, and it is expected that the influence take place to siblings of children with Developmental Disorder. In this research, for purpose of seeing state the family with a children with Developmental Disorder, to the center of the family function by the view point was sibling. Then, the performed quentionary survey for the parents with the sibling who had children with Developmental Disorder, with 50 sets. From result of the questionnaire survey that used the family function the relation of family function to the sibling sex, age, birth order, sense of isolation and, parents attitudes, were shown. From this result, it became clear that it is in the good state of by the family function that siblings expressed. However, verification will be necessary in future, because existence of activity participation influences, was guess.

Key words : children with developmental disorders 発達障害児  
siblings きょうだい  
family function 家族機能  
cohesion 凝集性  
adaptability 適応性

## 1. 問題・目的

障害児をもつ家庭は一般的にストレスを抱えこみやすいと思われている。しかし、実際的には問題を派生させる家庭とそうでない家庭があることも事実である。

そこで、注目されるのが家族のあり方である。すなわち家族にとって、問題が生じた時にどのように対処しているかによって、家族の状態が違ってくると考えられるのである。そして家族の状態を表す指標として家族機能 (Family function) というものがある。

家族機能とは主に、基本的な生活の安定を図る、心身の成長を促す、問題への対応能力という働きを意味している。そしてOlson (1979) は家族機能を評価するために円環モデル (Circumplex Model) を提唱している。

このモデルは、凝集性 (Cohesion) と適応性 (Adaptability) という二つの次元を中心に家族の機能を捉えるものである。凝集性とは家族メンバーが互いにもつ情緒的なつながりであり、適応性とは家族に問題が生じた場合に家族システムの勢力構造や役割関係を変化させる能力のことである。そのモデルでは、両極の端にあればあるほど家族機能が不適切であり (極端群)、中央に近づくほどにバランスのとれた状態 (バランス群) であると評価されている。家族の中の一人のメンバーに問題が生じればそれは家族のすべてに影響してくると考えられる。

浅井 (2004) は、問題に対処するためには、家族がある程度能動的な動きができるだけのパワーを持っていることが必要であると主張している。すなわち、家族機能を捉えることは家族の問題を理解するためにも極めて重要なことなのである。

1970年以降、障害児をもつことがその家庭にどのような影響を与えているかについて解明することが研究テーマとされてきた。現在では、泊 (1998) が述べるようにその影響を特に母親ばかりではなく、家族全体を対象として研究することが多くなってきている。

しかし、その研究報告としては、親の障害受容や養育態度といったものが多く「きょうだい」を含めて家族を取り上げたものはほとんどみられない。少なくとも家族は関係しあいながら生活をしており、一般的に問題が生じた場合は家族の中で弱い立場の者にマイナスの影響が生じやすい。それが障害児をもつ家庭ではきょうだい (以降、障害児をもつきょうだいを「きょうだい」とし、障害のある者を同胞とする) ではないかと考えられる。

このきょうだいは、主に同胞からの影響を受ける存在として見られてきた。吉川 (2004) の研究では、きょうだいや同胞の要因別で起こる反応を否定的側面や肯定的側面としてまとめている。これらは、ある要因が作用して起こるものと捉えられるが、それだけでは説明が難し

く、家族全体をみることが望まれているが、現在までそういった報告はまだ見当たらない。

そこで本研究では、きょうだいに視点を当て、きょうだいからみた家族機能を中心に、障害児をもつ家族の状態を捉えることを目的とする。さらに、きょうだいの肯定的反応として自尊心と、否定的反応として孤独感を取り上げ、これらの反応の違いが生じるにはどのような要因が関与しているのか、またこの反応の違いと家族機能との間に関係があるのかについて検討を加えていく。

## 2. 方法

### (1) 対象

本研究では、小学生以上のきょうだいと、その親を対象とした。なお、親については、母親、父親のどちらでもよいこととし、また両親の意見として回答してもよいこととした。

### (2) 調査期間

平成17年5月に1回目のアンケートの配布を行った。1回目のアンケート回収後修正をし、平成17年6月から8月の期間に再度アンケートの配布を行った。回収は、平成17年6月末から9月の期間であった。

### (3) 手続き

主に自閉症児者への活動を行っている機関に依頼をし、アンケートを配布した。親ときょうだいに分けて調査を行った。アンケートは無記名とし、所属機関と親子が分かるように番号をつけた。

直接配布できるところへは筆者が出向き配布をし、それ以外は担当者に説明をして配布してもらった。直接配布したアンケートの中には、親一人に対し、きょうだい二人分の調査を行ったものもあった。担当者に渡してもらった分も含め、回収はすべて個人別の郵送にて行った。

配布人数は全体で、きょうだい130人・親110人であり、回収率は全体で、きょうだい53%・親58%だった。

また回収後、きょうだいについては対象として含まれない者を、親についてはきょうだいからの回答がなかったものを除外した。そのため、きょうだい、親ともに50人ずつが分析対象となった。

分析対象となったもののうち、男女別、出生順位別、活動参加別に人数を出した。男女別で見ると男29人・女21人であり、出生順位で見ると、同胞より上 (兄または姉) は29人、同胞より下 (弟または妹) は18人、双子は3人であった。活動への参加が有るか無いかで見ると、参加している者は32人、参加していない者は18人であった。

これをさらに年齢別で見ると、小学生が27人、中学

生以上が23人であり、平均は13歳であった。出生順位別で見ると、兄が18人、姉が11人、弟が10人、妹が8人で双子が3人であった。

(4) 調査項目

〔親用〕

1) 回答者

2) きょうだいについて：年齢、性別、通学状況、活動参加状況、同胞についての説明、きょうだいについて思うこと、きょうだいへの態度 (Table.1) など。

Table.1 親のきょうだいへの態度

- |                             |
|-----------------------------|
| ① 二人だけになる時間がある*             |
| ② 何かをして頑張ったときはほめる*          |
| ③ 障害のある子もそうでない子も同じように育てている* |
| ④ きょうだい同士のことについて話しをする*      |
| ⑤ 話しを何でも聞く*                 |

(\*は逆転項目)

3) 同胞について：年齢、性別、通学状況、活動参加状況、障害の種類と程度、同胞について思うことなど。

4) 抑うつ感：ベック抑うつ尺度を参考にし、20項目から10項目に絞って作成した。回答は5件法にて行った (Table.2)。

Table.2 抑うつ感

- |                     |
|---------------------|
| ① よく眠れる             |
| ② 食欲はある             |
| ③ 健康について心配することがある*  |
| ④ 日常生活に満足している       |
| ⑤ 気分が沈むことがある*       |
| ⑥ 将来について不安に思うことがある* |
| ⑦ 親として責任を感じるがある*    |
| ⑧ 悲観的になることがよくある*    |
| ⑨ いらいらしたり腹をたてるがある*  |
| ⑩ 現在疲れやすい*          |

(\*は逆転項目)

〔きょうだい用〕

1) 年齢、性別、通学状況など

2) 家族機能：Olsonの作成したFACESⅢを、草田・岡堂が1993年に和訳したものを用了。

凝集性尺度、適応性尺度がそれぞれ10項目ずつからなっており、全て使用した。

回答は5件法で行った (Table.3)。

3) 孤独感：諸井の作成した日本語版孤独感尺度を参考

Table.3 家族機能

凝集性	<ul style="list-style-type: none"> <li>① 家族で何かをする時はみんなです</li> <li>② みんなで何かをするのが好きだと思う</li> <li>③ 休みの日には、家族みんなで一緒に過ごしている</li> <li>④ 家族はみんなで一緒にしたいことがすぐに思いつくと思う</li> <li>⑤ 家族はお互いにいつも一緒にいたいと思っている</li> <li>⑥ 家族のほうが家族でない人よりも分かり合っていると思っている</li> <li>⑦ 家族に優しくしたり、話しを聞いたりして生活することができる</li> <li>⑧ 家族は何かを決める時、家族の中の誰かに相談する</li> <li>⑨ 家族は困った時、家族の誰かに助けを求めたりする</li> <li>⑩ 家族はそれぞれの友人を気に入っている</li> </ul>
適応性	<ul style="list-style-type: none"> <li>① 家族の中でみんなを引っ張っていく人が決まっている*</li> <li>② 家族は誰がどの家事・用事をするか決まっている*</li> <li>③ 家族は自分の言うことも聞いてから注意する</li> <li>④ 家族は問題があった時、自分の話しも聞いてくれる</li> <li>⑤ 家族は問題があった時、同じように解決している</li> <li>⑥ 家族を引っ張っていく人はいつも同じ</li> <li>⑦ 家族は叱り方についてみんなで話し合う</li> <li>⑧ 家族の決まりはいつも同じ</li> <li>⑨ 家族で誰が家事・用事をするのか変わるときがある</li> <li>⑩ 家族で何かをする時など自分で決めることがある</li> </ul>

(\*は逆転項目)

に、20項目のうち10項目に絞って作成した。回答は4件法にて行った (Table.4)。

Table.4 孤独感

- |                           |
|---------------------------|
| ① 周りの人と仲良くできる*            |
| ② 他人を避けている                |
| ③ 自分が一人ぼっちだと思う            |
| ④ 親しい人がいる*                |
| ⑤ 楽しい気分にいることはあまりない        |
| ⑥ 親友がいる*                  |
| ⑦ 自分の考えは周りの人たちと違うと思う      |
| ⑧ 自分のことを理解してくれる人たちがいると思う* |
| ⑨ 話しかけることのできる人たちがいる*      |
| ⑩ 頼りにできる人たちがいる*           |

(\*は逆転項目)

4) 自尊心：Alice, Pope が開発した自尊心尺度を参考に、10項目に絞って作成した。回答は3件法にて行った (Table.5)。

Table.5 自尊心

①	失敗しても気にならない*
②	今の自分とはもっと違っていたらと思う
③	学校の成績には自信をもっている*
④	学校にいる時はとても楽しい*
⑤	自分の好きなスポーツやゲームがとてもうまいほうだと思う*
⑥	とても不器用だと思う
⑦	自分は家族にとって大切な一人だと思う*
⑧	今に自分ともっと違っていたら自分の家族も幸せだろうと思う
⑨	友達といるととても楽しい気持ちになる*
⑩	友達が自分のことを好きかどうかとても気になる

(\*は逆転項目)

5) 親の態度：父親と母親に分けて質問した。内容は、親がきょうだいに対して望まれる態度を、Harrisによって提示されたきょうだいのための配慮を参考に作成した。回答は5件法にて行った (Table.6)。

Table.6 きょうだいからみた親の態度

①	二人だけになる時間がある*
②	何かをして頑張ったときはほめてもらえる*
③	他のきょうだいと同じようにしてくれる*
④	他のきょうだいの話をする*
⑤	話を聞いてくれる*

(\*は逆転項目)

6) 自由記述

### 3. 結 果

#### (1) 家族機能の凝集性

##### 1) 凝集性ときょうだいのみ要因

##### i) 性別、年齢、活動参加、孤独感、自尊心

凝集性と性別、年齢、活動参加についてt検定を行った。

Table. 7 きょうだいの年齢による凝集性の差

	年齢	平均値	SD	t値
凝集性	小学生	32.3	7.32	2.417*
	中学生以上	28	4.32	

\*: p<.05

3つの要因のうち凝集性においては年齢についてのみ有意な差がみられた。Table.7より、年齢についてのみ5%水準で有意な差 (t=.17, d.f.=48, p<.05)があり、小学生のほうが凝集性が高かった。

次に孤独感、自尊心について相関係数を算出した。孤独感と自尊心のうち、凝集性と相関のあるものは孤独感だった。Table.8より、凝集性と孤独感との間に5%水準で負の相関 (r=-.343, p<.05)があり、凝集性が高いほど孤独感は低くなる関係にあることが分かった。

Table.8 凝集性と孤独感との相関

凝集性	孤独感
	-0.343*

\*: p<.05

##### ii) 孤独感、自尊心の各項目の凝集性と孤独感、自尊心について相関係数を算出した。

Table.9より、凝集性と孤独感①との間に1%水準で負の相関 (r=-.396, p<.01)、孤独感④との間に5%水準で負の相関 (r=-.358, p<.05)があり、凝集性が高いと孤独感①、④は低くなる関係にあることが分かった。

Table.9 凝集性と孤独感の各項目との相関

凝集性	孤独感①	孤独感④
	-0.396**	-0.358*

\*\* : p<.01      \* : p<.05

Table.10より、凝集性と自尊心④との間に5%水準で正の相関 (r=.302, p<.05)があり、凝集性が高いと自尊心④も高くなる関係にあることが分かった。

Table.10 凝集性と自尊心の各項目との相関

凝集性	自尊心④
	0.302*

\*: p<.05

##### 2) 凝集性と同胞との要因

##### i) 年齢差、出生順位、長男または長女か、障害の程度

年齢差、出生順位、長男または長女かにおいてt検定を行ったが、有意な差はみられなかった。障害の程度においては相関係数を算出したが、相関はみられなかった。

Table.11 凝集性における性別と年齢の平均・標準偏差と分散分析結果

		男性		女性		検定結果(F(1,46))		
		小学生	中学生以上	小学生	中学生以上	性別の主効果	年齢の主効果	交互作用
	N	15	14	12	9			
凝集性	平均値	30.87	28.43	34.08	27.33	F=0.361, n. s.	F=6.766*	F=1.490, n. s.
	SD	8.29	4.26	5.73	4.58			

\*: p&lt;.05

Table.12 凝集性における性別と出生順位の平均・標準偏差と分散分析結果

		男性			女性			検定結果(F(2,44))		
		上	下	双子	上	下	双子	性別の主効果	出生順位の主効果	交互作用
	N	18	10	1	11	8	2			
凝集性	平均値	31.56	26.7	26	28.45	34.75	32	F=1.705, n. s.	F=.130, n. s.	F=4.641*
	SD	5.76	7.53		5.68	6.04	0			

\*: p&lt;.05

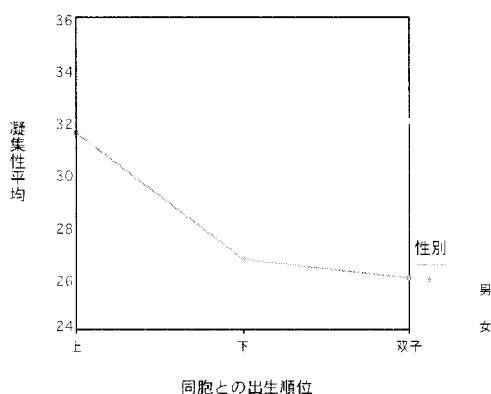


Fig.1 凝集性における性別と出生順位の交互作用

## ii) 性別と年齢、性別と出生順位

性別と年齢について分散分析を行った。

Table.11より、性別の主効果は認められず(F(1,46)=361, n.s.)、年齢による主効果(F(1,46)=6.766, p<.05)が認められた。性別と年齢の交互作用も認められなかった。(F(1,46)=1.490, n.s.)。これより、凝集性において性別と年齢では年齢の違いによって差があるということが認められた。

次に性別と出生順位について分散分析を行った。

Table.12より、性別の主効果(F(1,44)=1.705, n.s.)、出生順位の主効果(F(2,44)=.135, n.s.)はともに認められず、性別と出生順位の交互作用(F(2,44)=4.641, p<.05)は認められた。

交互作用が認められたため下位検討を行ったところ、Fig.1より凝集性が高いのはきょうだいの妹で、低いのは弟だった。兄と姉はその中間で、兄のほうが姉よりも凝集性は高かった。双子は人数が少ないため検討していない。

Table.13 凝集性ときょうだいからみた父親と母親の態度との相関

凝集性	父親の態度	母親の態度
	0.401**	0.457**

\*\* : p&lt;.01

## 3) 凝集性と親との要因

## i) きょうだいからみた父親と母親の態度、親の抑うつ、親のきょうだいへの態度

凝集性ときょうだいからみた父親と母親の態度、親の抑うつ、親のきょうだいへの態度について相関係数を算出した。

きょうだいからみた父親と母親の態度、親の抑うつ、親のきょうだいへの態度のうち、凝集性と相関のあるものはきょうだいからみた父親と母親の態度についてだった。Table.13より、凝集性ときょうだいからみた父親の態度(r=.401, p<.01)、母親の態度(r=.457, p<.05)との間に1%水準で正の相関があり、凝集性が高くなるときょうだいからみた父親と母親の態度も高くなる関係にあることが分かった。

## ii) きょうだいからみた父親と母親の態度、親のきょうだいへの態度の各項目

きょうだいからみた父親と母親の態度、親のきょうだいへの態度の各項目について相関係数を算出した。

Table.14より、凝集性ときょうだいからみた父親の

Table.14 凝集性ときょうだいからみた父親の態度の各項目との相関

凝集性	父親の態度②	父親の態度③	父親の態度④	父親の態度⑤
	-0.35*	0.369**	0.286*	0.367*

\*\* : p<.01    \* : p<.05

Table.15 凝集性ときょうだいからみた母親の態度の各項目との相関

凝集性	母親の態度②	母親の態度③	母親の態度④
	0.459**	0.32*	0.483**

\*\* : p<.01    \* : p<.05

Table.16 凝集性と親のきょうだいへの態度の各項目との相関

凝集性	親の態度②
	0.318*

\* : p<.05

Table.17 適応性と孤独感の各項目との相関

適応性	孤独感①	孤独感④	孤独感⑧
	-0.302*	-0.31*	-0.388**

\*\* : p<.01    \* : p<.05

態度② ( $r=-.35, p<.05$ ) との間は負で5%水準の相関があり、凝集性が高いときょうだいからみた父親の態度②は低くなる関係にあることが分かった。また、凝集性ときょうだいからみた父親の態度④ ( $r=.286, p<.05$ )、⑤ ( $r=.367, p<.05$ ) との間には正で5%水準の相関があり、父親の態度③ ( $r=.286, p<.05$ ) との間には1%水準で正の相関があるため、凝集性が高くなるときょうだいからみた父親の態度④、⑤、③も高くなる関係にあることが分かった。

Table.15より、凝集性ときょうだいからみた母親の態度② ( $r=.459, p<.01$ )、④ ( $r=.483, p<.01$ ) との間には1%水準で正の相関があり、母親の態度③ ( $r=.32, p<.05$ ) との間には5%水準で正の相関があるため、凝集性が高くなるときょうだいからみた母親の態度②、④、③も高くなる関係にあることが分かった。

親のきょうだいへの態度の各項目について相関係数を算出した。

Table.16より、凝集性と親のきょうだいへの態度②との間に5%水準で正の相関 ( $r=.318, p<.05$ ) があり、凝集性が高いと親のきょうだいへの態度も高くなる関係にあることが分かった。

## (2) 家族機能の適応性

### 1) 適応性ときょうだいのみの要因

#### i) 性別、年齢、活動参加、孤独感、自尊心

性別、年齢、活動参加においてt検定を行ったが、どの要因においても有意な差はみられなかった。孤独感、自尊心においては相関係数を算出したが、相関はみられなかった。

#### ii) 孤独感、自尊心の各項目

孤独感と自尊心の各項目について相関係数を算出した。

Table.17より、適応性と孤独感① ( $r=-.302, p<.05$ )、④ ( $r=-.31, p<.05$ ) との間には5%水準で負の相関があり、孤独感⑧ ( $r=-.388, p<.01$ ) との間には1%水準で負の相関があるため、適応性が高いと孤独感①、④、⑧は低くなる関係にあることが分かった。

### 2) 適応性と同胞との要因

#### i) 年齢差、出生順位、長男または長女か、障害の程度

年齢差、出生順位、長男または長女かにおいてt検定を行ったが、有意な差はみられなかった。障害の程度においては相関係数を算出したが、相関はみられなかった。

#### ii) 性別と年齢、性別と出生順位

性別と年齢における分散分析を行ったが、主効果や交互作用は認められなかった。また、性別と出生順位における分散分析を行った。

Table.18より、性別の主効果 ( $F(1,44)=5.222, p<.05$ )

Table.18 適応性における性別と出生順位の平均・標準偏差と分散分析結果

	男性			女性			検定結果(F(2, 44))		
	上	下	双子	上	下	双子	性別の主効果	出生順位の主効果	交互作用
N	18	10	1	11	8	2			
凝集性 平均値	30.22	29.1	22	29.09	30.88	34	F=5.222*	F=.282, n.s.	F=3.459*
SD	3.81	5.04		3.08	4.49	2.83			

\*: p&lt;.05

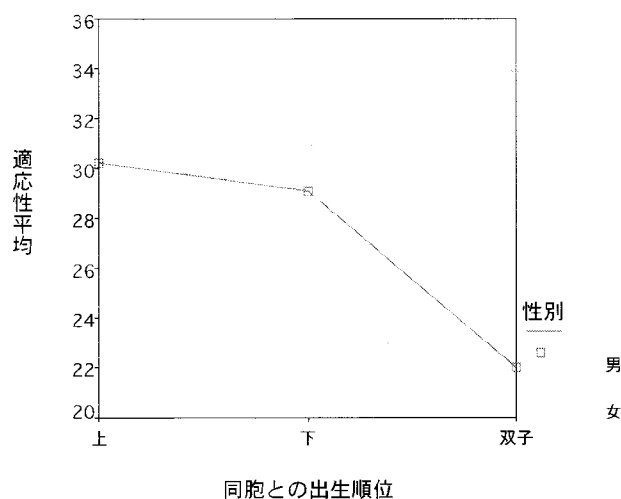


Fig.2 適応性における性別と出生順位の交互作用

Table.19 適応性ときょうだいからみた父親、母親の態度、親のきょうだいへの態度との相関

適応性	父親の態度	母親の態度	親の態度
	0.404**	0.386**	0.311*

\*\* : p&lt;.01   \* : p&lt;.05

Table.20 適応性ときょうだいからみた父親の態度の各項目との相関

適応性	父親の態度②	父親の態度③	父親の態度④	父親の態度⑤
	0.435**	0.411**	0.29*	0.323*

\*\* : p&lt;.01   \* : p&lt;.05

は認められたが、出生順位の主効果は認められなかった (F(2,44)=.282,n.s.)。また、性別と出生順位の交互作用 (F(2,44)=3.459,p<.05) は認められた。

交互作用があったため下位検定を行ったところ、Fig.2 より適応性が高いのはきょうだいの兄と妹で、低いのは弟と姉だった。双子は人数が少ないため検討していない。

### 3) 適応性と親との要因

i) きょうだいからみた父親と母親の態度、親の抑うつ、親のきょうだいへの態度

きょうだいからみた父親と母親の態度、親の抑うつ、親のきょうだいへの態度について相関係数を算出した。

Table.19 より、適応性ときょうだいからみた父親の態度 (r=.404, p<.01)、母親の態度 (r=.386, p<.01) との間に 1%水準で正の相関があり、親のきょうだいへの態度 (r=.311, p<.05) との間には 5%水準で正の相関があるため、適応性が高いときょうだいからみた父親と母親の態度、親のきょうだいへの態度も高くなる関係にあることが分かった。

ii) きょうだいからみた父親と母親の態度、親のきょうだいへの態度の各項目

きょうだいからみた父親と母親の態度の各項目について相関係数を算出した。

Table.20 より、適応性ときょうだいからみた父親の態度② (r=.435, p<.01)、③ (r=.304, p<.01) との間

Table.21 適応性ときょうだいからみた母親の態度の各項目との相関

適応性	母親の態度②	母親の態度③	母親の態度④	母親の態度⑤
	0.439**	0.304*	0.456**	0.445**

\*\* : p<.01    \* : p<.05

Table.22 適応性と親のきょうだいへの態度の各項目との相関

適応性	親の態度④
	0.424**

\*\* : p<.01

には1%水準で正の相関があり、父親の態度④ ( $r=.29, p<.05$ )、⑤ ( $r=.323, p<.05$ ) との間には5%水準で正の相関があるので、適応性が高いときょうだいからみた父親の態度②、③、④、⑤も高くなる関係にあることが分かった。

Table.21 より、適応性と母親の態度② ( $r=.439, p<.01$ )、④ ( $r=.456, p<.01$ )、⑤ ( $r=.445, p<.01$ ) との間に1%水準で正の相関があり、母親の態度③ ( $r=.304, p<.05$ ) との間に5%水準で正の相関があるため、適応性ときょうだいからみた母親の態度②、④、⑤、③も高くなる関係にあることが分かった。

親のきょうだいへの態度の各項目について相関係数を算出した。

Table.22 より、適応性と親のきょうだいへの態度④との間に1%水準で正の相関 ( $r=.424, p<.01$ ) があり、適応性が高いと親のきょうだいへの態度④も高くなる関係にあることが分かった。

#### 4. 考 察

##### (1) 家族機能における凝集性

家族機能における凝集性は、家族成員がお互いに対して持つ情緒的絆と定義されている。これは横軸でとらえられ、畠中 (2002) は程度の低いほうから高いほうへ順に拡散→分離→結合→膠着と分けられるとしている。

それぞれの具体的なタイプについて立木 (1999) は、拡散状態は家族の帰属意識が無く、家族の相互作用も低く感情的な交流がほとんど無い状態とし、分離状態はある程度の距離はあるがたまに帰属意識を示し、感情的交流も一応見られる状態、結合状態は家族には適度の帰属意識があり相互作用も強いがある程度の距離は認められ、感情交流も好まれる状態、膠着状態は過度の帰属欲求があり、感情の相互依存が顕著に見られる状態としている。

##### 1) 凝集性ときょうだいのみの要因

i) 性別、年齢、活動参加、孤独感、自尊心  
凝集性と性別、年齢、活動参加についてt検定を行ったところ、凝集性と年齢で5%水準で有意な差がみられ、小学生のほうが中学生以上よりも凝集性が高いという結果だった。また、凝集性と孤独感、自尊心について相関係数を算出したところ、凝集性と孤独感との間に5%水準で負の相関 ( $t=-.343, p<.05$ ) があった。

ライフサイクルにおける、学童期、思春期・青年期を考えていくと、学童期は親にまだ依存している時期であり、思春期・青年期は親から離れていく時期にあたり友人との関わりが深くなっていく。家族の発達段階でみても、子どもが学童期である時期に親は家族内のシステムを調整するが、思春期・青年期に入ると子どもの独立を促し、家族の境界を柔軟にしていかなければならない。

今回の結果から、年齢において凝集性をみたときに、注目すべきは時間と空間、および友人との関係である。学童期は友人との関係を作っていく時期ではあるが、やはり心理的基盤としては家族との関係 (その中でも親との関係) によりウェイトをかけているものであり、一方思春期は親よりも友人との関係を重視して自分に合った友人と仲を深めていく時期と思えるからである。そして、仲間同士の付き合いや部活や習い事が増えるものの、家族という時間が減少していく。

つまり、きょうだいからみた凝集性の結果は、家族全体がどのような状態かというよりも自分が家族に対してどのような状態であるかを現していると考えられるのである。

思春期の子どもは、アイデンティティの確立を模索しはじめる。この時期の子どもを抱える家族にとって、親と子どもはお互いが心理的距離をもって一人立ちすることが課題となる。思春期の子どもにとって、アイデンティティを確立させるためには自らの問いに答え



なければならず、その問いに答えるためには一番身近な者（家族）を起点にするのである。そのため、家族という器がしっかりとしたものでなければ、問題が生じる可能性がある。

きょうだいと思春期にあたる場合は、同胞の存在によって思春期の問題がより強調されていきやすい。なぜならば、同胞は何かできるようになっただけで喜ばれるのに、きょうだいはできて当たり前として、さらにそれ以上の達成を求められ、きょうだいと親との間で心理的食い違いを生じることも予想される。しかし、このような体験をしながらも自分を受け入れることできょうだいは成長していくことになるのである。

また、凝集性が高ければ孤独感は低くなっており、結合か膠着状態にあるほうが孤独感は低くなる傾向にある。すなわち、本研究の結果ではきょうだいが一入であると感じていると孤独感が高い傾向にあることが示唆されており、凝集性のタイプで考えてみても一人であることが少ない方が結合、膠着状態と推測できるのである。

#### ii) 孤独感、自尊心の各項目

凝集性と孤独感と自尊心の各項目について相関係数を算出した。その結果、凝集性と孤独感①との間に1%水準で負の相関 ( $r=-.396, p<.01$ ) があり、孤独感④との間に5%水準で負の相関 ( $r=-.358, p<.05$ ) があつた。また、自尊心④との間に5%水準で正の相関 ( $r=.302, p<.05$ ) があつた。

凝集性が高ければ周りの人と仲良くすることや、親しい人を作る方へ意識が向いていないようである。特に、周りの人と仲良くすることとの関係は高く、凝集性が高くなるほど周りの人との関係を良くしようと意識はしていないように思われる。

この状態は凝集性のタイプでは膠着状態に当てはまるのではないだろうか。家族内のことに関心が強いいため、外的なものを取り入れる気持ちが少なくなるのかもしれない。もしくは、家族内のことに目を向けていくことで、外的なものを見つめ、受け入れることに躊躇しやすくなるのかもしれない。

障害児を持つ家族においては、家族機能が良好であればあるほどすべてのことが障害児に中心がおかれる傾向となりやすいため、膠着状態が生じやすくなるのが今回の結果から導き出されるのである。そのため凝集性が高い家族に対しては、家族以外にも関心を与えるような支援が必要と思われる。

#### 2) 凝集性と同胞との要因

凝集性について性別と年齢、性別と出生順位で分散分析を行った。性別と年齢では、性別の主効果は認められず ( $F(1,46)=.361, n.s.$ )、年齢による主効果

( $F(1,46)=6.766, p<.05$ ) が認められた。性別と年齢の交互作用は認められなかった ( $F(1,46)=1.490, n.s.$ )。性別と出生順位では、性別の主効果 ( $F(1,44)=1.705, n.s.$ )、出生順位の主効果 ( $F(2,44)=.135, n.s.$ ) はともに認められず、性別と出生順位の交互作用 ( $F(2,44)=4.641, p<.05$ ) は認められた。凝集性が高いのはきょうだいの妹で、低いのは弟だった。

きょうだいにストレスを与える家族の要因については、西村(2004)の年齢と出生順位に関する研究において、男性で同胞に近い年齢の者は傷つきやすいという結果が得られている。川上(1999)のきょうだいの問題行動に関して母親が評価を行った研究では、性別と出生順位が絡むと、弟に問題行動があるという得点が有意に高いという結果となっている。そしてこれまでの研究においては同胞の年齢差を2歳以内と2歳以上で分けて検討して、弟であるきょうだいは傷つきやすいという報告が行われている。

本研究の結果においても2歳以内の弟においては凝集性が低いことが分かった。このことは、弟であるきょうだい傷つきやすい傾向がより強いために、内的境界や家族で過ごす時間が関係して、凝集性が低い結果になっているのではないかと考えられる。そしてこのことは、孤独感とも関連があるように推測される。

#### 3) 凝集性と親との要因

凝集性ときょうだいからみた父親と母親の態度、親の抑うつ、親のきょうだいへの態度について相関係数を算出した。その結果、凝集性ときょうだいからみた父親の態度 ( $r=.401, p<.01$ )、母親の態度 ( $r=.457, p<.05$ ) との間に1%水準で正の相関があつた。

さらに、凝集性ときょうだいからみた父親と母親の態度、親のきょうだいへの態度の各項目について相関係数を算出した。その結果、凝集性ときょうだいからみた父親の態度② ( $r=-.35, p<.05$ ) との間には負で、④ ( $r=.286, p<.05$ )、⑤ ( $r=.367, p<.05$ ) との間には正で5%水準の相関があつた。父親の態度③ ( $r=.286, p<.05$ ) との間には1%水準で正の相関があつた。きょうだいからみた母親の態度② ( $r=.459, p<.01$ )、④ ( $r=.483, p<.01$ ) との間には1%水準で正の相関があり、母親の態度③ ( $r=.32, p<.05$ ) との間には5%水準で正の相関があつた。また、全体で相関はなかったが、親のきょうだいへの態度②との間に5%水準で正の相関 ( $r=.318, p<.05$ ) があつた。

凝集性の高さは、同胞と同じように接することや、きょうだいが母親から頑張ったことに対してほめられていることに関係していた。このようなことから、親子間の境界ははっきりしており、両親は話を聞いてくれるときょうだいは思っており、親子間の親密さもう

かがわれる。これより家族が分離、結合状態になりやすいことが示唆される。

しかし、凝集性が高いにもかかわらず、父親がきょうだいの頑張りを受けてほめてくれるときょうだいを感じていないことが示されている結果をみれば、その家庭は拡散状態になる危険性がこの点にあるように推測できる。

このことは、凝集性が低いからこそ父親はきょうだいの関係を作ろうと努力しているとも考えられる。しかし、他の項目では凝集性と父親の態度との相関が認められていないことを考慮すれば、きょうだいとしては父親から賞賛されることをより強く求めていると推測できるのである。

## (2) 家族機能における適応性

家族機能における適応性は、状況や家族発達に伴うストレスに対応して、家族内の勢力構造、役割関係、役割に関する取り決めを変えていく、システムとしての家族の能力と定義されている。これは縦軸でとらえられ、畠中(2002)は程度の低いほうから高いほうへ順に硬直→構造化→柔軟→無秩序と分けている。

それぞれのタイプについて立木(1999)は、膠着状態では権威主義の高度の親支配があり、例外や寛大さはなくきまりは絶対に変わらず約束は厳格に守られる、構造化状態では権威主義的だが民主的にもなる、しつけはきちりとしていてあまり寛大でなくきまりはほとんど変わらず約束はかたく守られる、柔軟状態では変化に対して民主的なリーダーシップがとられ、臨機応変な対応がなされきまりもある程度の変更はでき約束も柔軟に運用される、無秩序状態では行き当たりばったりのリーダーシップがとられ、不適切なしつけできまりも日まぐるしく変わり約束の実行が一貫していないとしている。

### 1) 適応性ときょうだいのみの要因

適応性と孤独感、自尊心の各項目について相関係数を算出した。その結果、家族機能における適応性と孤独感① ( $r=-.302, p<.05$ )、④ ( $r=-.31, p<.05$ ) との間には5%水準で負の相関があり、孤独感⑧ ( $r=-.388, p<.01$ ) との間には1%水準で負の相関があった。

適応性と孤独感では周りの人との関係、特に家族においては親との関係に注目する必要がある。なぜならば、適応性が低ければ、自分を理解してくれる人がいないと感じていることが推測され、そのため家族はきょうだいの意見を聞き入れることが少なくなり、柔軟な対処がされにくいと予想されるからである。

結果の出た孤独感の3項目だけで見ると、孤独感を抱くきょうだいの家族は硬直や構造化した家族の状態にあると考えられるのである。

### 2) 適応性と同胞との要因

適応性について性別と出生順位で分散分析を行った。その結果では、性別の主効果 ( $F(1,44)=5.222, p<.05$ ) は認められたが、出生順位の主効果は認められなかった ( $F(2,44)=.282, n.s.$ )。また、性別と出生順位の交互作用 ( $F(2,44)=3.459, p<.05$ ) が認められた。適応性が高いのはきょうだいの兄と妹で、低いのは弟と姉だった。

凝集性において述べたように、これまでの研究でも、弟であるきょうだいの方が傷つきやすさをもっていることが示唆されている。そして、障害者のきょうだいへ面接を行い、きょうだいの特徴をまとめた三原(2000)の研究によれば、同胞の弟や妹にあたる場合は両親が障害児の世話に追われ、十分な注目と関心が得られず辛い体験をしたことや、障害の理解の難しさが示唆されている。

兄や姉であるきょうだいについては、早樫ら(2002)の研究によって親をモデルとし親代理の役割をとろうとすることもあることが報告されている。母親ときょうだいの気持ちのズレと問題との関連を調べた川上(1999)の研究によれば、母親の投影同一視は姉であるきょうだいに過度の期待を与え、きょうだいと母親の予想のズレが大きくなると姉であるきょうだいにストレスが生じているとしている。これに関して、長女は養育代行者としてのストレスが高いといわれているという報告もある。

今回の結果からみれば、妹の適応性が高いということは、親が障害児の世話に忙しく妹であるきょうだいのしつけが十分に行えていないのではないかと推察できるのである。また、姉であるきょうだいの適応性が低いことは、姉であるきょうだいが親のような役割をすることが決まっており、その役割が変えられないのではないかと考えられる。

すなわち、適応性の高低はきょうだいがどのような負担を感じているかまでは結論づけられないが、家族の状態をある程度予測できる指標となるのではないかと考えられるのである。

### 3) 適応性と親との要因

適応性ときょうだいからみた父親と母親の態度、親のきょうだいへの態度について相関係数を算出した。その結果、きょうだいからみた父親の態度 ( $r=.404, p<.01$ )、母親の態度 ( $r=.386, p<.01$ ) との間に1%水準で正の相関があり、親のきょうだいへの態度 ( $r=.311$ ) との間には5%水準で正の相関があった。

さらに、適応性ときょうだいからみた父親と母親の態度、親のきょうだいへの態度の各項目の相関係数を算出した。その結果家族機能における適応性ときょうだいからみた父親の態度② ( $r=.435, p<.01$ )、③ ( $r=.304, p<.01$ ) との間には1%水準で正の相関があり、父親の態度④ ( $r=.29, p<.05$ )、⑤ ( $r=.323, p<.05$ ) との間には

5%水準で正の相関があった。母親の態度② ( $r=.439$ ,  $p<.01$ )、④ ( $r=.456$ ,  $p<.01$ )、⑤ ( $r=.445$ ,  $p<.01$ ) との間に1%水準で正の相関があり、母親の態度③ ( $r=.304$ ,  $p<.05$ ) との間に5%水準で正の相関があった。また、適応性について、親のきょうだいへの態度④との間に1%水準で正の相関 ( $r=.424$ ,  $p<.01$ ) があった。

全体でみると、きょうだいからみた態度でも親のきょうだいへの態度でも、態度が高ければ適応性も高くなっている。適応性と態度をみると両者の意見は、ほぼ一致しているといつてよい。

個別的にみていくと、適応性と親の態度については、しつけと問題解決の相談が関係していることが示唆されている。話し合いがなされているときょうだいを感じているほど適応性も高く、親だけでなくきょうだいの意見も反映されていると思われる。そして、頑張ったらほめてもらえていると感じていることから、適応性は良好であり、放任されてはいないという実感をもっていることがうかがえる。

この結果からみれば、本研究において対象とした家族においては、適応性の構造化と柔軟にあてはまるきょうだいが多く強いことが強く示唆されているとみてよいようである。

#### (6) 発達障害児をもつ家庭における家族機能の状態についての検討

本研究の結果をもとに発達障害児をもつ家庭の家族機能の状態を捉えると、今回対象となった家族はほとんどがバランス群の領域に入っているということが分かった。

このような結果になった理由としては、対象者の家族は外交的家族であり、療育指導やグループ活動などこれまでにいろいろな活動に参加しているという要因が作用しているからであろうと考えられる。外交的な家族であることは、家族だけに閉ざされた状態ではなく、家庭外との交流をするためにまとまりができていて、ある程度家族機能は安定しているということが考えられる。きょうだいが活動に参加していなくとも、その家族の一員であることに変わりはないため、きょうだいの活動参加の有無に関わらず、家族機能の結果がバランス群に収まっているのではないだろうかと推測できる。

これをさらに、家族機能における凝集性や適応性に関する要因として、対象児の年齢、孤独感、きょうだいからみた父親と母親の養育態度、きょうだいの位置などについての結果に基づいて以下に考察していく。

まず、年齢においては小学生と中学生以上で分けて検討を行った。このように分けたのは、ライフサイクルにおける児童期と思春期・青年期という二つの発達段階の違いを考慮したためである。今回の結果では、児童期にある群では多くの家庭の家族機能は結合-柔軟にあるこ

とが分かった。その一方で、思春期・青年期にある群の家族機能は、分離-構造化に多いということが導き出されている。

このことは、児童期は親への依存が友人関係よりも重視されているためであり、思春期・青年期では友人関係をより重視する時期にあるからではないかと推測できるのである。

孤独感については、障害児が家族にいることでほとんどのことが障害児中心の生活になる傾向が強く、きょうだいもその事に関心を向け、自己をあわせていこうとするために家族機能とすれば膠着状態が生じやすいと考えられた。

孤独感が高い群の家族機能は、分離-構造化、結合-柔軟にあることが示唆され、低い群の家族機能は分離-構造化、結合-柔軟に散らばるばかりでなく、膠着-柔軟の領域まで広がっていることが認められる。これは、物理的に一人であること、話を聞いてもらえないという精神的に一人であることが関係していると予想される。

きょうだいからみた父親と母親の態度では、本研究の結果では母親の態度の違いよりも父親の態度の違いのほうが、きょうだいにより強い影響を与えているのではないかと考察された。父親の態度を高く評価しているきょうだいは結合-柔軟に多く、低く評価しているきょうだいは分離-構造化、結合-構造化に多くあることが示されている。また、母親の態度を高く評価しているきょうだいは結合-柔軟、結合-構造化に多く、低く評価しているきょうだいは分離-構造化にあることが分かった。このことは、頑張ったら親がほめてくれるかや、話しを聞いてくれるかということと関係しており、障害のある同胞がいる中で、親がきょうだいの問いかけに柔軟に対処しているかどうかを反映している。話は聞いていないもの、事務的なやりとりである場合はよく話しを聞いてもらえていないとして、きょうだいは親の態度を低くみていく可能性が推測できる。

きょうだいの位置についての結果からは、同胞の障害から弟と姉であるきょうだいが影響を受けやすく、妹が影響を受けにくいということが示唆された。

影響を受けやすいとした弟、姉について、弟は分離-構造化に多く、姉は分離-構造化、結合-構造化に多いことが分かった。その一方で、影響を受けにくいとした妹は結合-柔軟、結合-構造化にあることが示されている。兄は分離-構造化、結合-柔軟、結合-構造化に散らばっていて、ある一つのパターンに収束していない結果となっている。姉は、役割の固定化や親代理の負担が結果として現れているのではないかと推測され、弟は、家族の距離や時間のとり方が影響されていると考えられる。

以上のことから、きょうだいからみた家族機能は、バ

ランス群の中でも分離－構造化、結合－柔軟、結合－構造化の領域にあることが分かる。なかでも、負の要因として考えられているものは分離－構造化に多く、正の要因として考えられているものは結合－柔軟に多いことが強く示唆されている。

そこで、とくに分離－構造化と結合－柔軟の領域に位置するものの要因としてどのようなことが作用しているのかをまとめてみる。分離－構造化には、思春期、孤独感が高い、きょうだいからみた父親と母親の態度が低い、弟、姉という要因が主にあることが分かる。

これらから、この領域に入るきょうだいの特徴は、思春期にあたり自分から家族との距離を保とうとしていたり、家族内の役割や親の態度に十分な満足を得ていないため家族との距離を感じているというものではないかと思われる。そして、その家族の特徴は、きちんとしたしつけのもとで、親の意見が強く反映しており役割が変化しづらく、家族外との関係が強い家族ではないかとうかがわれる。

結合－柔軟には、児童期、孤独感が低い、きょうだいからみた父親と母親の態度が高い、妹という要因が主にあることが分かる。これらから、この領域に入るきょうだいの特徴は、児童期にあたり親との関係を重視しており、親の態度に満足しており家族との距離が近いのではないかと思われる。そして、家族の特徴は、きょうだいの意見も尊重され、役割も変化可能で、家族内の関係が外よりも強くお互いのことをよく知っている家族ではないかということがうかがわれる。

望ましい家族機能は家族の状態によってその時の望ましい形を求めて変化させていると思われる。本研究では、きょうだいからみた家族機能であったため、きょうだいの発達段階や家族への思いが反映された結果となったといえる。しかしきょうだいの思い（すなわち、障害のある同胞の理解や認知、きょうだいからみた父親と母親の養育態度など）に焦点を当てたとしても、家族は影響しあっていることを前提に考えると、きょうだいの家族への思いが実際の家族機能に影響を与えている可能性も考えられるのである。

家族機能には、子どもの養育、生活の保証、家族構成員の心身の安定、発達課題や問題解決の対応などが含まれて、その機能レベルは家族構造が移り変わる環境に適応することができるかによって決まってくるようである。

これまでの検討内容に基づいて考えると、今回の研究対象となった家族の機能はかなりうまく作用し、保たれているように思われる。しかし、この家族の状態は一定ではなく変化しやすいものであり、状態に応じてそのように変化することが望まれるものである。そのため、今ある状態を捉えようとした本研究の結果からは、必要に応じた家族の変化までは検討できなかった。

そして、対象となった家族がこれまで多くの活動に参加しており、それらの家族の機能がバランス群にあったことを考えると、活動参加の有無が家族機能に影響をもたらすのではないかということが指摘できるのである。このようなことから、活動に参加している者のほうが家族の状態もよいという傾向を見出せたが、まだ十分に明らかにすることはできなかった。

また、きょうだいの肯定的反応と否定的反応の違いが家族機能に影響しているのかは、それぞれ一つの項目しか質問しておらず検討できなかった。そのため、活動参加による家族機能の違いを中心に家族の状態を捉え、発達障害児をもつ家庭がどのようにバランスをとっているのかを、今後さらに検証する必要がある。

## おわりに

障害児をもつ家庭では、そうではないの家庭と違った家族の形をとることになる必然性があるかもしれない。それが家族のバランスを保つための方法であって、その家庭における家族機能の結果として導き出されてくるものと考えることが大切である。しかし、そのバランスがうまくとれなくなることで問題が生じるとされる。それは特に、家族成員の発達の段階ごとや危機的状況に陥った時に生じることが予想される。そのため家族の機能を捉える視点が重要であると考えられるのである。

きょうだいは、“障害”による影響よりも、障害に伴う変化からくる影響を強く受けているように思われた。そのきょうだいが家族に求めるものは、そのきょうだいによって違うだろうが、障害児をもたない家庭よりも家族としてまとまりをもつことが重要なのではないだろうか。

また、きょうだいに何の問題のない状態があるとしても、それはもともとそのような状態だったわけではない。そのような状態になるには紆余曲折を経てたどり着く状態であるので、一時的な問題にふりまわされず家族の機能をうまく変化させていくことが望まれる。

### <付記>

今回の調査研究をするにあたり、多くの方々に協力していただきました。忙しい中協力いただいた各機関の先生方やスタッフの方々、アンケートに快く協力してくださいましたご家族のみなさまに深くお礼申し上げます。

また、論文執筆にあたり、御助言をいただきました鹿児島大学の平川忠敏先生、当大学非常勤講師の山田博文先生をはじめ、多くの先生方に衷心より感謝申し上げます。

この研究をまとめるにあたり、今後さらに障害児者のきょうだいへの支援の活動が広がればと祈念しています。

## <引用・参考文献>

- 1) 浅井朋子、杉山登志郎、小石誠二、東誠、並木典子、海野千畝子 (2004) : 軽度発達障害児が同胞に及ぼす影響の検討. 児童青年精神医学とその近接領域, 45 (4), 360-371.
- 2) 早樫一男、団士郎、岡田隆介〔編〕(2002) : 知的発達障害の家族援助. 金剛出版.
- 3) 畠中宗一〔編〕(2002) : よくわかる家族福祉. ミネルヴァ書房.
- 4) 平川忠敏 (2004) : 自閉症のきょうだい教室. 児童青年精神医学とその近接領域, 45 (4), 372-379.
- 5) 川上晶子、エレーラ・ルルデス、永田真弓、宮里邦子、田中義人 (1999) : 障害児のきょうだいが抱える問題. 第46回日本小児保健学会講演集, 342.
- 6) 三原博光 (2000) : 障害者ときょうだいー日本・ドイツの比較調査を通してー. 学苑社.
- 7) 西村辨作 (2004) : 発達障害児・者のきょうだいの心理社会的な問題. 児童青年精神医学とその近接領域, 45 (4), 344-359.
- 8) 立木茂雄 (1999) : 家族システムの理論的・実証的検証ーオルソンの円環モデル妥当性の検討. 川島書店.
- 9) 泊裕子、古株ひろみ、竹村淳子、石川清美 (1998) : 障害児とそのきょうだいの相互作用について (1)ー遊び場面の対照群との分析比較ー. 第4回日本家族看護学会.
- 10) 吉川かおり (2001) : 障害児者の「きょうだい」が持つ当事者性ーセルフヘルプ・グループの意義ー. 東洋大学社会学部紀要, 39 (3), 105-118.